

第 1 回授業公開 in 新潟大学を終えて



約 70 名の学生・教職員が参加！

2024/9/9 発行

7 月 8 日（月）の 2 限に「第 1 回授業公開 in 新潟大学」を総合教育研究棟で開催しました。第 1 回は、附属新潟小学校 5 年 2 組の子どもたちの詩の授業（授業者：中野裕己教諭）でした。教職大学院の講義『授業における学習研究』を学部生や教職員にも開き、参加者を募ったところ、大雨の中だったにもかかわらず、8 専修以上（他学部を含む）から 70 名以上の学生・教職員が参加してくださいました。協議会では、教職大学院の学生を核に学生間で小グループを作って授業について語り合った後、教育学部の足立先生から国語科教育の視点からの本時の価値について、教職大学院の実務家教員として田代先生から教師の働きかけの細やかさについて、授業者の中野先生から授業の解説と教職の魅力についてそれぞれ語っていただきました。最後には、参加者との質疑応答も行い、充実した協議会となりました。

2022 年 12 月に出された答申「『令和の日本型学校教育』を担う 教師の養成・採用・研修等の在り方について ～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を 有する質の高い教職員集団の形成～」においても、教職大学院と学部との一層の連携強化をすることが重要であり、学生の相互交流等を推進し、理論と実践を往還させたり、教職の魅力が伝わる機会を設けたりする等の取り組みをすることが求められています。教職大学院と附属学校、教育学部が連携し実現した本企画はまさにこの答申において求められていることを具現化させたものであると思います。

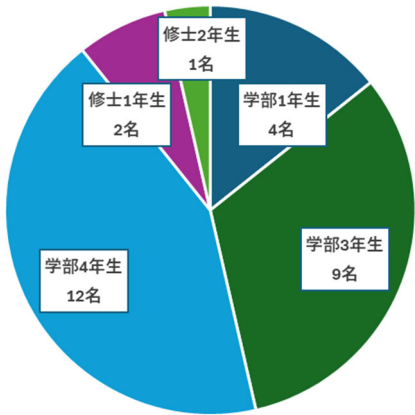
授業者の中野先生、協議会に登壇くださった足立先生はもちろんですが、附属学校、附属学校部、教育学部、教職センター、教職大学院の多数の先生方、参加してくれた学生の方々、多くの方に支援いただき本企画を実施することができました。誠にありがとうございました。

アンケート結果

協議会終了後、昼休みの時間になってしまっているにもかかわらず参加した多数の学生からアンケートへの協力を得ることができました（n=28）。

①学年

アンケートに答えてくれた 28 名の学生の、学年内訳は次のグラフのとおりです。学部 3・4 年生が多数を占めていました。

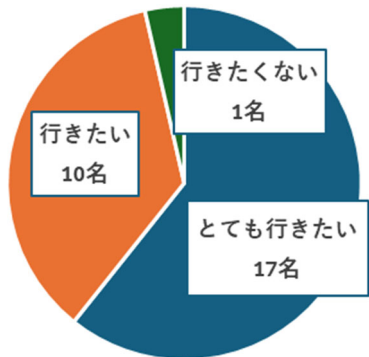


②企画の満足度

28 名のうち全員が今回の企画への満足度に対して、「とてもよかった」と回答していました。

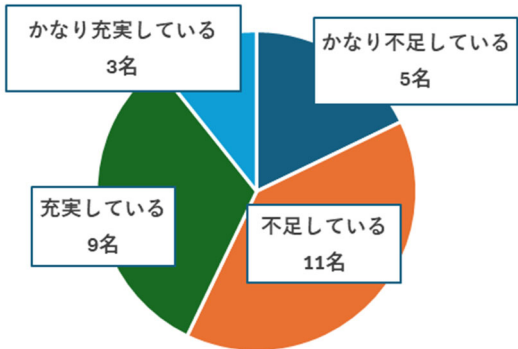


②附属学校に授業参観に行く機会が欲しいか
28 名のうち 27 名が附属学校に授業参観へ「行きたい」という思いを持っていました。

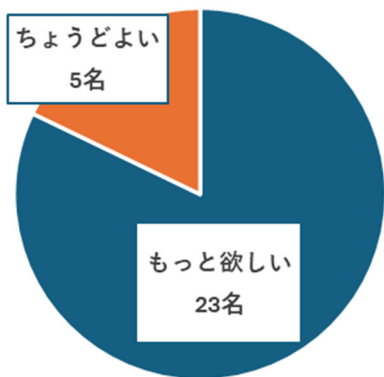


④実践的な学びの機会に対する認識

実践的な学びの機会に対して、過半数を超える学生が「不足している」「かなり不足している」と回答していました。



また、28 名のうち 23 名と多数の学生が実践的な学びの機会に対する認識として「もっと欲しい」と回答していました。



講義担当者から		参加者の声 「今日の授業を見学させていただいて学んだことは小学生の先生として大切なことは何かということです。先生の授業を見学して、子供達が話している時にしっかり子供達に対して耳を傾け、良かった発言や興味深い発言があったら発言させているところが印象に残りました。そういう子供達の言葉をしっかり聞く力が大切であることを学ぶことができました。本日はありがとうございました。【学部 1 年：社会科学教育】」 「学習指導案の児童の反応の予想にはなかったものから、新たに授業が展開していき、討論が深まっていったところが面白かったです。読みやすさに着目させたらうで、読みやすさはあくまでも個人の感覚であるが、「作者には伝えたいことがあるはずだからわざわざ改行をしてる」というように、自分の思いに加えて相手意識から推測させることで、主観のぶつかり合いにならないような工夫があると思いました。【学部 3 年：教育心理】」 「教師と生徒が共に学ぶ姿を感じることができた。私自身授業中の沈黙や指導案から話題が逸れてしまうと不安になってしまいが、それを楽しみたいと感じた。【学部 3 年：人文学部】」 「多くの方仰っていましたが、子どもだけでなく先生も授業を楽しんでいる姿が印象的でした。また、つぶやきやすい環境作りという点も信頼関係があって初めて成り立つ環境だと思うため、いい授業時間だったと感じました。【学部 4 年：理科教育】」 「教師は教える立場という考えは安易に捨てることのできない一種の刷り込みのようなものだと思いますが、今日の中の先生のように子供と一緒に学ぼうとする姿勢、子供とのやり取りを楽しむ姿勢はこれからの教師にとってはとても大切なもののように感じます。【修士 1 年：教職大学院】」 	
子どもの考えに驚き、語ること 田代孝（教職大学院） 学ぶことは本来楽しいことです。これまでに学んだことや経験を総動員して未知に向かってみんなで探究し、物事が少しずつ明らかになるワクワク感があるからです。今回の授業では詩を扱いました。詩の作者は私たちが日常的に使う言葉遣いとは異なる表現を用います。日頃の感性とは異なる言葉を味わうことが詩を読む楽しみの一つです。 こうした詩の言葉を味わうことは感性的、主観的であり、共有できる言葉にして表現することは難しいことです。でもこの難しさを楽しさに変換し、みんなで探究したのが今回の授業だったと思います。 このような授業を行うにはどのようにするとよいのでしょうか。中野先生の姿から私が捉えたことを 2 つ挙げます。			一つ目は子どもの考えに驚くことです。「だから（改行）きみの新しい住所と（改行）名前を きちんと（改行）書こうと思った」の検討の際、中野先生は「おもしろ！」とつぶやきました。中野先生は素直に子どもの発言に驚いたのだと思います。この驚きは子どもの考えを認め、他の子どもに広げ、探究をさらに進めていきました。 二つ目は子どもに語ることです。中野先生は授業前に前方に子どもを集めて視線をつないで会話をして緊張をほぐしていました。授業中盤で「どこが強調されてる？ お隣さんと相談してみて」と発問、指示した際も視線を合わせて子どもの身体に言葉が入るようにゆっくりと話していました。 子どもと一緒に驚き、表現し合うと共に、深層に向かって語り、思考を焦点付ける働きかけについて「自分ならどうしようかな？」と考え、実践することも教師にとってはワクワクすることです。
子どもの学びを楽しみ、そこから学ぼう 有井優太（教職大学院） 「あっ、なるほど、それ考えてなかった」。今回の授業で、授業者の中野先生が子どもの発言の後に発したつぶやきでした。実際の授業やその後の協議会の語りからも、1 つ 1 つの動きに教師の意図が込められており、その質が極めて高いことは授業を見に来てくださった皆さんは感じたと思います。そんな附属学校の先生でも授業は想定通りにはいかないのです。今回の授業の中で、参観してくださった皆さんに 1 番感じてもらいたいと思ったことは、子どもの学びは豊かであるということです。子どもの学びは一律一斉に統制可能なものではありません。ただし、だからと言って教師は何もできない、すべきではないということではありません。子どもたちの			学びをより豊かにするために触発することはできます。そのためには、事前に計画していたねらいを授業中の子どもの学びから即座に更新していくことが必要です。これは一朝一夕にできることではありません。しかし、よく分からないなと思う子どもの発言でも、その子はどのような世界をまなざしているのだろう？と子どもの声に耳を傾け楽しむこと、教材研究をしっかりすることを積み重ねていけばいずれできるようになってきます。 こうした授業の不確実性に対して、不安を感じる方も多いでしょう。しかし、授業の楽しみや喜びは、単に子どもに対して一方的にトレーニングメニューを施すということではなく、子どもと共に対象世界の探究をしていくことにあると思います。今日の授業から、子どもの学びを楽しみ、そこから学べる教師の喜びを感じてもらえたらうれしいなと思います。

授業者から

“授業”とは、何か？

附属新潟小学校
研究主任
中野裕己 指導教諭

毎年たくさんの学生の皆さんに、附属新潟小学校にて教育実習をしていただいています。毎年必ず感じることは、学生の皆さんの勤勉さです。非常に熱心に、誠実に教育実習に取り組まれる方ばかりで、こちらも背筋が伸びる思いです。

授業では、丁寧に教材研究をし、授業の展開を構想し、その通りに進めようと一生懸命に指示をする姿が見られます。そして、その通りに進まなかったときには、「うまくいきませんでした」と、反省の弁を述べられる方が多くおられます。

そこで私が、

「Aさんは、こんな素敵なことを書いていたよ」

「Bさんは、こんなことを言っていたよ」

と、子供の豊かな学びを伝えるのですが、残念ながらほとんどの方の耳には入らないようです。

時には、

「先生、もっと厳しく言ってください」

「どうすればうまくいったのでしょう」

と、助言を求められる方もおられます。もちろんその熱意と誠実さは素晴らしいのですが…向ける方向が適切ではないとも感じています。

授業とは、教師が子供をコントロールして学ばせるものではありません。さらに言えば、教師のコントロールがなかったとしても、教材や題材に向き合いさえしていれば、子供はひとりでに学んでいるのです。自分の思った通りではないからといって、子供それぞれの学びを見ようとしないことは、とても不誠実ではないでしょうか。そして、もったいないことではないでしょうか。

もちろん、授業には「ねらい」があるはずですから、教師がある程度ガイドしていく必要はあるでしょう。そして、ガイドするためには、教材研究と授業構想は絶対に必要です。ただし、授業が始まれば、優先すべきは目の前の子供です。教師の思い通りに進めるのではなく、子供それぞれの学びを支えることが大切です。

今回の授業公開は、ここまで述べたような考えに基づいて授業を行っています。詩を提示して、子供の探究の矢印が伸び始めたら、私は徹底的に子供の学びを見取りつないでいました。学生のみなさんはどう受け取られたでしょうか。もちろん、学級担任である私がやるような授業をする必要はありません。きちんと授業を構想して、それを大切に授業を進めていただいて結構です。ただし、自分の思い通りにならなかった授業を、「うまくいかなかった」とひとくくりにしないでください。

どのような授業でも、きっと豊かに学んでいる子供がいるはずです。そのような子供を見つけて、そのような子供の思考を探ることが、授業力をつけるための一番の方法だと断言します。